

他人の気持ちを考える

1. 教育を考える一言

「その言葉を聞いたら、この服の持ち主はどう思うかな？」

2. 背景

小学校3年生のときの担任の先生の言葉です。

帰りの会の中で、先生が黄色いトレーナーを持って私たちに尋ねました。「忘れ物がありました。体育館にあったから一組の人のものだと思うんだけど、誰のかな？持ち主の人は手を挙げてください」。教室中がざわめきます。みんなが顔を見合わせて、首をかしげます。「俺のじゃない」「私のでもないよ」。お調子者で、目立ちたがりだった私が一際大きな声で「俺のでもないよ、そんなダサイの着ないし」。先生と目が合います。とても悲しい目。「東くん、その言葉を聞いたら、この服の持ち主はどう思うかな？」。最後まで手は挙がりませんでした。

3. 考察

小学校入学直後（6～7歳頃）は、ピアジェの発達段階説において前操作的表象期に含まれます。前操作的表象期の特徴の一つは自己中心性にあり、他人の見地から物事を考えるということがうまくできません。小学校三年生と言えば8～9歳にあたり、発達段階説においては次段階の具体的操作期に含まれるのですが、当時の私は友達と遊ぶときに自分の考えが通らないとすぐ癩癩を起こしたりしていたので、自己中心性のコントロールも他人の気持ちを考えることも出来ていなかったように思います。

上に述べた先生の言葉は、そんな私に他人の気持ちを考えるきっかけをくれました。先生にその言葉を言われるまで、「どういう発言をすればみんなにウケるか」ということばかり考えていて、トレーナーの持ち主のことなどまったく考えていませんでした。言われて初めて、トレーナーの持ち主のことを考え、この教室に在るであろうその人の気持ちを考え、とても申し訳ない気持ちになりました。このことがあってから私は他人の気持ちの存在を意識するようになり、他人の気持ちを考えて行動することが出来るようになりました。そして次第に友達との摩擦も減っていきました。

いまでも持ち主は誰だったんだろうと考えることがあります。現実には分かるはずはない不毛な問いかもしれませんが、しかしこの問いかけは、今でも目立ちたがり屋でともすれば他人の考えを無視しがちな私にとって、他人の気持ちの存在を思い出させてくれる貴重なものとなっています。

参考文献

波多野完治『ピアジェ入門』国土社、1986年

松谷みよこ『わたしのいもうと』偕成社、1987年